萩博物館企画展

なつかしい日本のふるさと・萩

～1930 年代の映像・絵画から～

会期：平成 22 年 12 月 11 日（土）～平成 23 年 4 月 10 日（日）

町村合併から鉄道開業、そして萩市市制施行・山陰本線全通と、１９３０年前後の萩の「まち」では、様々な面で近代化が推し進められていました。

そのような中で、明治維新や藩都に由来する多くの史跡や、海山川の豊かな自然への注目も集まるようになります。この時期、史跡・名勝の指定や保全活動も活発になり、それらを活用した観光を基軸とした「まち」づくりが企図されます。

今回の企画展では、しばしば「なつかしい日本のふるさと」と形容される萩の「まち」の、「なつかしさ」や「心のやすらぎ」の源といえるものを、観光立市をめざし始めた当時の映像や絵画で振り返ります。

【私たちのふるさと】

大正１４年（１９２５）４月、萩駅が開業。萩の「まち」に初めて鉄道が敷設されました。明治維新から半世紀、依然として萩の「まち」は、城下町のたたずまいを色濃く残していました。鉄道開通を機に、「まち」に点在する維新の志士旧宅・旧跡を初め、史跡や名勝、寺社や桜の名所などを訪ねる人が増えてきます。注目が集まるようになったそれらを、保全しつつ活用しようとする動きが活発になります。

市制施行時に制作された「萩市鳥瞰図」（1932 年）

【文化観光都市のさきがけ】

昭和７年（１９３２）７月１日、萩市は市制を施行しました。新萩市建設の過程で、市内や地域の史跡・名勝を観光する人を誘導することや、教育の拠点となることが検討されました。そして、観光を基軸の一つとしたまちづくりが始まり、それに合わせて様々な事業が展開されました。市制施行３周年を記念した『萩史蹟産業大博覧会』は、史跡を保全しつつ経済振興を図るというユニークな取り組みでした。

萩史蹟産業大博覧会ポスター（1935 年）

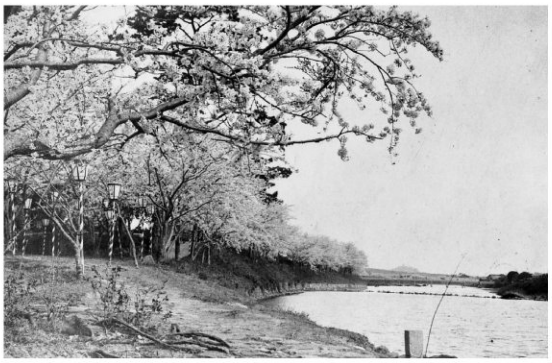
【1930 年代の映像に見る萩】

市内旧家に伝わった１９３０年代撮影の映画フィルムには、当時の萩の「まち」の賑わいや、多くの史跡名勝が鮮やかに記録されています。市制施行から、山陰本線全線開通、萩港整備と、「まち」の近代化が推し進められていた時期の撮影です。映像中の人々の生き生きとした表情や、それらの人の背景に見える城下町を起源とした「まち」のたたずまいが印象的です。

1930年代撮影映画フィルムのコマ取り画像

【なつかしい日本のふるさと】

萩の「まち」は、しばしば「なつかしいふるさと」とか「日本のふるさと」と形容されます。人々は、何に「なつかしさ」や「心の安らぎ」を覚えるのでしょうか。今後も「なつかしい日本のふるさと」であり続けるには、どうすれば良いのでしょうか。かつて萩の「まち」の人たちが、当たり前のこととして継承してきた「こと」や「もの」、「心豊かな暮らし」などについて、あらためて思いをめぐらせていただければ幸いです。



1930年代撮影「ふるさと・萩」写真